
青ハルナシの青春～除霊の夏休み

夏一陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青ハルナシの青春〜除霊の夏休み

【Nコード】

N8115Y

【作者名】

夏一陽

【あらすじ】

青ハルナシは多くの霊に取り憑かれていた。そのせいで初恋の女の子には告白中に逃げられ、クラスメイトも霊に怯えて友達さえできない暗い青春を送っていたのだ。ハルナシは負けの人生を打破するべく、高校2年生の夏休みに本物の霊媒師がいるという宮崎の高千穂を訪れる。（ホラーにする予定はありません）

告白

沈んだ夕日が山稜を赤く照らして、山火事の煙のような黒い雲が向こうの空からやって来た。校舎を押しつぶすように雲が広がり始めるのを見て、今日は暗くなるのが早いなあ、と小学生の青ハルナシは思った。

体育館の入口の階段を上り下りしたり、別に渴いていない喉を水場で潤したりして時間を潰していると、同級生のミスズが現われた。いつもは落ち着いているミスズも、目をキョロキョロさせながら近づいてくる。ハルナシも、心臓の鼓動がミスズに聞こえているのではないかと思えるほど、緊張と興奮の高まりにあった。

「……………みつちゃん……………」

ハルナシの喉から出てきたのは蚊の飛ぶような弱々しい音で、今まで発したことのない別人の声に、慌てて口を覆った。そしてすぐに咳払いをして声の調子を整える。

「……………おっ、俺、みつちゃんのこと好きだからさっ。だからっ、だからその……………俺と付き合っって欲しいんだ」

言ったあと、呼吸が荒くなるほど心臓が高鳴っていく。ミスズは目を伏せたままだが、外灯の弱々しい明かりを受けた真っ白な頬が、少しずつ赤くなっていくのが分かった。

「……………わたしも、はる君のことが、……………好きだよ」

心臓が破裂したのではないかと思えるほど、全身にスツとしたものが広がった。告白の言葉を考えて、昨夜は一睡もできなかったこ

とが脳裏に浮かんで、不意にうれし涙がこぼれそうになり気づかないように手の甲で拭う。

そうして二人が沈黙したとき、『カタカタ』と乾いた音が近くの水場から聞こえてきた。

二人はハツとした。誰かが盗み聞きをしているのではないかと思っただからだ。もしそうならば、二人の告白がクラスメイトにとって笑いの標的にされるかもしれない。

ハルナシはすぐに階段を降りて水場の裏に回った。ミスズはゆっくりと階段を下りながら追いかける。

「……何の音だったの？」
「バケツ」

水の入ったブリキ製のバケツが水場に置いてある。こんなところにバケツなんかあったかな、とハルナシが思っていると、夜風が吹いてバケツからカタカタと音がした。底が歪んでいるせいかバケツが揺れてコンクリートと底がぶつかっている。

バケツを持ち上げてひっくり返すと、墨汁のような黒い液体が排水口に奇妙な音を立てながら吸い込まれていく。女の人の低い声に似た下水溝の音が静かな校舎に響き渡った。

不気味に思ったミスズは、もう帰ろうとハルナシに話かけようとしたとき、目を丸くして息をのんだ。

ハルナシの足首に何か引つかかっている。

何か、濡れた生き物のようだ。よく見ると、それは色こそ真っ白だが、人の手の形をしている。

暗闇に浮かび上がったのは、黒髪の女がハルナシの足をよじ登ろうとしている光景だった。濡れた黒髪が女性の顔を覆っているのに、その表情は分からないが、力なく倒れて這っているのに、白い手だ

けは必死になってハルナシの足を握り締めている。そして白い手は最初に二つしかなかったが、ハルナシの背後から一つ、また一つと増えていく。

ミスズはしばらく体を動かせなかった。何回かまばたきをするが、黒髪の女性の姿がはつきりと目に映る。幻なんかではない。

ゆっくりとミスズはハルナシの足元を指差した。

「……はる、くん……足」

ハルナシが足元を見ると同時に、黒髪の女もゆっくりと顔を上げる。

わずかな明かりが頬から照らし出されて、口元からゆっくりと黒髪に隠された顔を見せる。ミスズは女性と目が合うと、悲鳴を上げて闇夜へ逃げていった。ハルナシもすぐに追いかけようとするが、足が全く動かない。

「な、なんだよこれっ……」

このとき初めて、ハルナシは恐怖よりも怒りというものが、沸々と湧き上がってくるのを感じた。

「く……くそっ、くそっ！ またかよ！ お化けのバカヤローッ！」

民宿の珍客

ハルナシは東京の中野区から7時間10分もかけて、神話の里と呼ばれる宮崎県高千穂町の国道を車で走っている。

羽田空港から宮崎空港までは3時間ほどで着いたが、宮崎市から高千穂町までは飛行時間よりも長く車の助手席に座るはめになった。進んでも進んでも山が群れのように行く手を阻み、その合間を縫うように進み続けて、やっと高千穂町に辿り着いたのだった。

すごい田舎だと聞いていたが、コンビニや知っている看板が点々と通り過ぎて、携帯電波も感度がよく安心した。確かに田畑の数は圧倒的に多いが、風景としてはずっとこっちのほうがいい。都会の蒸し暑さとは無縁で、夏らしい青々とした稲や草木が風に吹かれるたびにキラキラと光を帯びている。

国道に沿って民家や商店が並んで繁華街らしき場所は見つからなかったが、ハルナシにとってみれば町の活気やその手の祭りやイベントの話はどうでもよかった。

車は民宿の玄関前に停まり、運転席の叔父が車から降りた。白のペンキが剥がれかかった玄関の壁には、『片江荘』と書かれた木の板が打ち付けられている。

「荷物持ってこんけ」

叔父はハルナシのもう一つのバッグを担いで2階へ上がっていく。ハルナシも後部座席からバッグを出して、土間から上がり叔父の後を追った。

ハルナシの部屋は8畳ほどの広さで1人で過ごすには十分だ。木枠の窓を開けると、さきほど通ってきた道が見える。なんでも売ってそうな突き当たりの商店の裏は水田が広がっており、どこことなく

懐かしく感じた。

ハルナシは小学生の頃に2年間ほど、父方の実家であるこの町に住んでいた。小学生のときの強烈過ぎる記憶が1つ残っているだけで、ここに来るまでに何か思い出すようなことはなかった。

「晩御飯は7時から。朝飯は朝の7時からやかい、遅れんごっせんといかんよ」

叔父は3つ目の荷物を部屋に置いて下へ降りていく。

足音が消えたのを見計らって、ハルナシは持ってきたバッグから『お清め3点セット』を取り出した。

まず粗塩を取り出して部屋の周囲に少しまいたあと、札を壁に貼り、お神酒も置く。そして札に手を合わせる。

「ふー……」

ハルナシは環境が変わったとき、周りを清めなければ安心できなかった。それは習慣のようなもので、子供のころから怪奇現象やポルターガイストなどに、数え切れないほど遭遇していたためだった。ハルナシの霊を呼び寄せる力は、常人を逸していた。小中学校の写真は必ず心霊写真で、学校のその手のよくある怪談話がハルナシにとっては現実のものとなり、友達の家に遊びに行くと行ったその日からお化け屋敷と化したりするなど、ハルナシの通う高校のクラスメイトからは、歩く怪奇現象と呼ばれていた。

ハルナシはやっと落ち着いて、般若心経を唱えながら畳に寝転がった。

「……何、薄気味悪いことしてんの……？」

ハルナシの部屋の入口で女の子が腕を組みながら、ハルナシをじっと見下ろしている。ハルナシは慌てて飛び起きた。

スパッツにインナーのようなキャミソール姿であまりに軽装だったので、自分以外にも誰かが泊まっているのだろうと一瞬だけ思ったが、堂々として威圧するような態度からするとこの民宿を縄張りになっている近所の小学生かもしれない。

「長い間ここに泊まるつもりだからね、お被いしてたのさ……。それより、君はどこの子かな？ あんまり、この部屋には近づかないほうがいいよ」

女の子は眉間にしわを寄せると、構いなしに部屋に入ってくる。

「はあ？ ……なにそれ？ 脅してんの？」

「いや……そういうわけじゃなくて……」

やけに勝気な女の子だな、と思ったのも束の間、女の子が涙目になっていることにハルナシは気づいた。

「なんで忘れちゃっているのよ……。私だよ、従兄妹のロンだよ……」

高千穂に居たときの記憶を探り、ロンという特徴的な名前での出来事を検索を試みる。

「あ、ああっ……。思い出した！」

「やっと思い出したか……。まあ……。6年前のことだから許してやる」

ハルナシが小学6年生のころにロンは小学3年生だった。2年間

だったが、ハルナシとロンは兄妹のように学校に通っていて、帰宅途中にこの民宿に寄りたりしていたこと思い出した。

「……お前、随分変わったな。見た目は小学生のままだけど」

言った瞬間、ロンの飛び蹴りが30センチ差のハルナシのジョーをとらえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8115y/>

青ハルナシの青春～除霊の夏休み

2011年11月29日01時59分発行